

である。

お重は上さんの持つて来た浴衣を引被けると、「一寸」と云つて、庭傳ひに母屋へ行つた。其儘、何を話して居るのやら、小一時間も歸らなかつた。

後の二人は、別に談合ふ程のこともなく、まじく顔を見合せて居る所へ、お重が戻つて来て、突然、

「直様、お湯へ入りやアせんか」と云つた。

「あゝ」と、私も横に成つたまゝ、ぐるりと向直つた。

「入りやアすなら、直に入つとくりやアせ。私も後で一風呂浴びたいから——」

「ぢや、左様しやうね。」

私は直に立上つた。

湯殿は裏座敷の隣にある。小女がよちくと大きな手桶を下げて来て、湯の加減を見て呉れた。鐵砲風呂の中に首迄浸りながら、うつとりして居ると、廂から晝間の薄白い月が覗いて居た。

やがて、好い加減にざつと洗つて、眞赤に燦つた足を片足代りに拭きく上つて来て、

「おい、最う明いたせ」と、椽側から聲を掛けると、

「えゝ、今一寸手が引けませんから」と云ふ聲に次いで、お卷の笑ふ聲がした。

見ると、お重がお巻の背後へ廻つて、髪を梳いて遣つて居る。私は火鉢の側へ寄つて、一人で茶を注いで呑みながら、器用に梳櫛を扱ふお重の手許を見守つて居た。

やがて、それを下に置いて、

「ぢや、揚卷に束ねて置くぞなも。私や其外の髪は旨く結はれないんだから——」

「え、何卒——左様ぢやけど、私そんな髪に結つたことないで、私に似合ふか知ら——」と心配相である。

「さ、髪結さんが上手ぢやでなも。だが、貴方の様な面長の顔には、束髪はうつるのよ」と、お重は手早く髪を束ねにかゝつた。二三度結直して、

「これで如何？これで如何なの」と、鏡に映して見せながら、又自分で解ぐして、やつと四度目位に結び上げた。

「ま、此位にして置かうかいも」と、反古で油手を拭いて居たが、又氣になるのか、梳透しで鬢の邊りを弄つて見た。

「え、何うも有難う」と、合せ鏡をして居たお巻は、それを下に置いて、何處やら嬉し相に禮を云つた。「これで薩張したわなも。」

「直に湯へ這入ませうね」と、お重はてきぱき櫛の道具を仕舞つて、鏡臺を片寄せながら立上つた。

「さ、早く被入アすな。あ、左様、白粉壺を持つて行きませうね。」
 兩女は一緒に湯殿へ這入つた。

少時笑聲がして居たが、氣が附いて見ると、何時の間にやらふつつり止んだまゝ、待てど暮せど上つて来る様子もない。女の長湯だと思つても、一人子然と待つて居る退屈さに、庭へ下りて、掘抜井戸の噴水の中に手を入れて見たり、裏の池に繋いである生洲の蓋を開けて見たりして居たが、到頭湯殿の前へ行つて、

「おゝ」と喚んで見た。

「え？」と云ひさま、内側から披き戸を開けた。夕日の日影がずつと射し込んで、湯殿の中は龕燈提灯を向けた様に明るい。

「如何したんだい」と訊いて見た。

「あゝ、今直きですから——一寸目眩しいに其處を閉めて置いてお呉れ

やすな。」

私は直に又びたりと閉めた。

何でも、兩女ながら流板の上へ出て、お重がお卷の顔に白粉を塗つて遣つて居たものらしい。相手がお重だけに、何だか姉女郎がぼつと出の妹女郎を取廻はす様でもある。それでなけりや、娘をお浚ひに出した母親が氣を揉んで居るやうな——私は裏庭を往反りしながら、そんな事を考へて、一人北叟笑むだ。

やがて兩女とも湯から上つて來た。二人ともこつてり化粧で、つぼめた唇を光らせて居たが、取分けてお重の容色が水際立つて、歳さへ十歳餘り若やいで見える。餘りちやんと濟まして居るので、

「そんな風にして、暑かア無いかい」と訊くと、

「お化粧すると、却つて涼しうなるものですよ」と云つて聞かせた。

夕餐はお重の持参物を開いて、三人一緒にした。私は何時になく酒を取寄せて、一人で二三杯傾けた。お重はあんな稼業をして来たものにも似ず、お合ひさへ出来ぬと云つて手を振つた。

夕餐後、私は其邊を散歩しようかと言出した。お重も一寸首を傾げたが、此邊なら別に知つた人もないし、殊に夜だから構はなからうと云ふので、直に賛成して呉れた。お卷一人うぢ／＼して、何だか出ともないやうな氣振ひを見せた。それに出るとしても、下駄からして無いと云ふのである。

「ぢや、其下駄を買ひに行かうぢやないか。」

「でも、こんな在郷の町に有りますか知ら」と、未だ危なげである。

お重も側から口を添えて、

「さ、何うせ好い物は無いでせうが、庭穿の様なのでも、一足無いことには困るでせう。」

「左様ぢやなも」と、お卷も納得して隨いて來ることにした。

そろ／＼人顔の見えぬ頃、青田を渡る涼風に吹かれながら、二人の女を連れて、一筋仄白くつゞく街道をぶら／＼歩くのは、漫ろに心も浮くものである。私は二人を遣り過して、二人の後姿を見較べながら、のそ／＼隨いて行つたが、時々息が詰まるやうな心持がして立停つた。何も

知らぬ二人は路傍に待合せて、私が近づくくと又歩き出した。

下駄屋は町の取附にあつた。が、買物は歸路のことにして通り過ぎた。先づ此町で名高い弘法大師の寺へ行つて見たが、夜のことでは有り、命日でもないので、境内は寂寞ひっそりとして人氣もない。びたりと盲目の眼の様に閉切つた扉の外から拜を遂げて、其儘引回した。片田舎のことゝて、大通りと云つても、賑やかな所はほんの店舗なら七八軒並んで居るに過ぎない。其餘は百姓家も同然である。三人は結句それを好いことにして歩き廻つたが、何處からともなく、二たび下駄屋の前へ出た。

「如何するか」と云ふと、

「えゝ、這入りませうなも」と、お重が先に立つて這入つた。

成程、下駄は山の様に積んであるが、いづれも格恰の變な、いやに臺の高い物ばかりで、町の女の齒に合ひ相なのは一つもない。それでも、兩女は其中から彼れか是れかと撰り好みをして、やつとの事で一足購ふことにした。私は墓口から一圓紙幣を出して十五錢釣を取つた。

元の裏座敷へ戻つて、暫く縁側で團扇を使ひながら涼んで居たが、汗の退くのを待つて、小女を喚で寢る仕度をさせた。小女は急いで上さんを喚びに行つた。やがて上さんは小女と一緒に遣つて来て、蚊帳の釣手が何うとか斯うとか云ひながら、三疊間の中を迂路々々して、何時迄も果てしがない。

「如何したんぢやな」と、お重が縁側から聲を掛けた。「私なら別に釣ら

んでも、一つ蚊帳の中へ這入つて寝ても可いぞな。」

「え、そりやお前さんは可えぢやろが——」と、上さんは矢張仰向いで鴨居の邊りを手探りに探つて居る。

「なに、私や横に成ると、直ぐ寝て仕舞ふから構はんさな」と、お重は事もなげに云つた。

私は、不圖、繰船の夜を想出した——あの女の兩腕の間に狭まれながら、まじく〜と眠られなかつた夜を。何だかそれをお重が知つて居るらしい、知つて居ながら、空慌けて居るらしくも思はれる。

兎に角、如何にかして三疊間の蚊帳も釣れたらしい。

「最う可えかな。ぢや、お先へ失禮」と、お重は何時になく自分から先

へ蚊帳の中へ這入つた。

私は返辭をすることも忘れた。かうして別々に蚊帳へ這入つて寝るのが、何となく氣が差して、暫く蚊帳の外へ出て居た。寢床へ這入つてからも、音さへ立てぬ様にして静乎と辛抱して居た。三疊の方からは時々想出したやうに團扇を使ふ音が聞えた。

明くる朝、お卷は一人早くから寢床を出た。私もつゝいて起上つた。お重だけ何時迄経つても起きて來ない。襖の隙間から覗いて見ると、壁の方へ向いたまゝ、片腕をにゆつと出して、寝て居るのか身動きもしない。

私達が待ち勞びれて朝食を済ました頃、やつと目を覺まして出て來た。

「何うも眼が流れて仕舞ふ程寝たなも」と云つた限りで、ぼんやり庭の上を眺めて居た。

それからも懶さうに足を投出して坐つたまゝ、餘り口も利かなかつた。此日は近邊の休日と見えて、午后に成ると、いろ／＼の風體をした男が七八人も此家へ聚つて來た。母屋の二階へ上つて何うも様子が袁玄道でも開張するらしい。小女を捕まへて訊くと、近所の若衆が寄つてけるの札を引いてるのだと云ふことである。

間もなく、お重は一人母屋へ行つた。如何したのやら、夕飯時に成つても歸らない。私は何だか博打の仲間へ這入つて遣つてるのぢやないかと云ふやうな氣がした。小女を喚びに遣らうかとも思つたが、其儘捨て

て置いた。

其夜、一時頃に成つて、お重はやつと戻つて來た。次の間で、少時灰吹の音がして居たが、やがて横に成つて寝たらしい。

又、次の日が來た。今日もお重は朝から母屋へ行つた。何だか故と左様して二人を避けて居るらしい。二人の方でも、お重を邪魔にするやうな氣振らひが見えたのか知ら——成程、お重の前では二人とも餘計な話はない。二人寄つて居る所へお重が來て、途中で話を止めたこともある。併しお重のお蔭で二人一所に寄りながら、最うお重を要らぬものと思つて居る様に取りられるのも心苦しう。

かうして二三日経つた。お重の心持を憚りながら、矢張打出して何と

云ふことも出来なかつた。

或朝、未だ朝飯も喰はぬ間から、駒吉が血相變へて遣つて來た。様子を聞けば、何うも自宅の方の話が面白くない。それにお卷の宅ぢや、到頭警察の力を藉りても娘を捜出さうとして居るやうだから、兎に角、一旦此處を立てと云ふのである。

それだけ云ふと、駒吉は直に又引回して行つた。

最早何を云つて居る暇もない。三人は遽て、此家を引上げる仕度にかかつた。私達は別に行く所もないから、六月入學試験を受けて、秋から學期の始まることに成つて居る、或北國の學校の所在地へ向けて旅立つことにした。それにしても、お重は何處へ行く氣だらう。

私は幾たびか女の顔色を見て居たが、思ひ切つて、「お重、お前は如何する氣かい」と訊いて見た。

「私？」と此方に向いて、「私は矢張大阪へ行くより仕様が無いでせう。」大阪へ行つて、何處か手頼る所でもあるかと訊いて見たかつたが、黙つて居た。

「まさか娼妓をして居た時のお客の所へも行かれまいが、あの頃の主人もあるでなも。」

斯う云ひながら、お卷の帯を後ろから緊めて遣つて居た。

やがて頼んだ腕車も來たので、大垣から西行の汽車に乗るつもりで、三人一緒に宿を出た。二里の田舎道をがた／＼と輪の鳴る腕車に揺られ

て、午後一時頃、やつと大垣の停車場へ着いた。汽車の都合で、停車場前の旅館へ上つて、又三時間餘りも待合せた。

いよ／＼汽車の出る時間が来たので、四邊に氣を配りながら遽て乗込んだ。お卷は殊にびく／＼して居た。

垂井、關ヶ原と過ぎて、伊吹山の麓からそろ／＼日が暮れかゝつて。やがて米原驛へ着く。私達は此處で降りて、北國行の汽車に乗換へなければ成らぬ。

二人はプラットホームの上に立つて、汽車の中のお重を見守つて居た。お重も窓から顔を出して二人を見返して居た。薄暗い洋燈の灯の下で見る所爲か、ひどく寢れて、影が薄い様にも思はれる。

間もなく、汽車が動き出した。

「左様なら、お二人とも御機嫌宜しう」と、お重が頭を下げた。

「左様なら、／＼」と私達も挨拶を返した。

見る／＼お重の姿は見えなく成つた。列車の窓が目まぐるしくつゞく。私は急にあの女が可哀相で堪らぬやうな氣がした、追ひかけて何とか言つて遣りたいやうにも――

終



大正元年九月十二日印刷
大正元年九月十五日發行

現代文藝叢書
第十五編(初戀)
定價金貳拾五錢

著者	發行者	印刷者	印刷所	發行所
森田米松	和田靜子	金子久太郎	三協印刷株式會社	東京市日本橋區通四丁目五番地

電話本局五十一
振替口座東京一六一七

陽春堂

現代文藝叢書目次

第一編	正宗白鳥	泥人形	(版三)
第二編	徳田秋聲	我子の家	(版七)
第三編	鈴木三重吉	女と赤い鳥	(版十)
第四編	水野葉舟	山上より	(版五)
第五編	後藤宙外	草あやめ	(版四)
第六編	野上白川	巢鴨の女	(版三)
第七編	泉鏡花	歌行燈	(版五)
第八編	生田長江	最近の小説家	(版五)
第九編	田山花袋	死の方へ	(版四)
第十編	小川未明	物言はぬ顔	(版三)
第十一編	兒玉花外	哀花熱花	(版三)
第十二編	小山内薫	霧	(版二)
第十三編	島村冬三	貝	(版二)
第十四編	笹川臨風	柳	(版二)
第十五編	森田草平	初	(版新)
第十六編	小野賢一郎	溝	(刊近)

現代文藝叢書世評一般

●泥人形 (二六新聞)

現代文藝叢書の第一篇として公にされた「泥人形」及「死後」の二篇を収めて居る、元來本叢書發行の計畫は獨逸のレクラム會社の文藝叢書のそれを踏襲したもので、本の體裁からして其れに類似して居る、若し十年、二十年と續いて永遠に遺て貰へるならば至極結構な事だ。

世評一般

●泥人形 (創作)

現代文藝叢書の第一篇として發刊せられたものである。本年七月の早稻田文學にて好評を博した「泥人形」の外に「死後」の一短篇を加へ、二百頁を以て一部とした小形の氣持のいい本である。「泥人形」は守屋といふいつも安住する事の出來ない、ナイヒリスチックな男が、家庭といふものでも持てば、少しは落ちつく事が出来るだらうかといふ氣まぐれ心の

ら、若い妻を娶り、しかも却て放蕩のなつかしさを覺えたといふやうな事を描いたものである。當時可成評判のいゝものであつたが自分にはさう大したものと感じる事は出来なかつた。それよりもどちらかと云へば「死後」の方に、より多く深い印象を受けた。あまり多くは發揮されないが、以前からあつた白鳥氏のある一面のかうした氣分を自分になつかしく思ふ。

●我子の家 (中央公論)

(前略)秋聲氏の作品は此篇に限らず、總て滋味であつて、深く人生の一角を描破する所、何人の追思も許さぬのであるが、一體が滋味

がつて華やかな賑やかな所の少い所から、作品の價値に比して人氣の乏しいのは文壇の爲め深く惜む所である。

●我子の家 (ホト、ギス)

春陽堂發行現代文藝叢書の第二編である。收めたる「我子の家」「祭」「新店」、以上三篇の小説、何れも著者が得意の材料より成るもので、シミな技巧、クスンだ筆致の間に、人生の薄暗い、ジリ／＼と壓し迫つて来る、如何にもならぬ運命といふやうなもの、響が、漂うてゐる。蓋し他の侵略を許さない境地を占むるものである。

●女と赤い鳥 (二六新聞)

著者は鏡花に似て居ると言はれて居る人であるが、然し鏡花とは大分行き方が違つて居るやうだ、殊に其の文章に至つては、全く別種のものと言つても好い唯だ女性には兩者互に共通な所があるかも知れぬが、然し其を以て直に著者を鏡花に類似せりと云ふは酷だ、ネオロマンチズムを標榜して居る著者が、果して何の邊まで進み得るか、其れは疑問だが、兎に角本書の如きは日本に於ける其の派の代表的作品と言つても好いと思ふ、此の意味に於て本書の價値は認められる。

現代文藝叢書目次(其二)

- 第一編 泥人形(正宗白鳥)
- 第二編 我子の家(徳田秋聲)
- 第三編 女と赤い鳥(鈴木三重吉)
- 第四編 山上より(水野葉舟)
- 第五編 草あやめ(後藤宙外)
- 第六編 巢鴨の女(野上白川)
- 第七編 歌行燈(泉鏡花)

●女と赤い鳥 (帝國文學)

『女』は獨逸のロマンテイケルの作をでも讀むやうな氣がしてならなかつた。熱のある女が心の悶えを主にしてとらはれぬ男を配したものだ、女の心の一面は中々に躍動して現はれてゐる。それと西洋文學の影響が或る度までこなされて出て居るのは注意すべき點である。『赤い鳥』はしつとりとした筆致といふ點では前者よりも更に此作者の特長を現はしてゐる。事件の運びも前者よりすらくとして、筆が落着いてゐる。自分には此の方がなつかしく讀まれた。

●女と赤い鳥 (ホト、ギス)

現代文藝叢書の第三編として『女』と『赤い鳥』との二篇を集めたるもの、共に著者が最近の傑作である。殊に『女』は去る四月本誌臨時増刊『五人集』中の一異彩であつた事は讀者の記憶に新たなる所であらう。女性描寫に於ては他人の企及を許さざる獨得の手腕を有つてゐる著者は、この二作に於ても、女性をして主要なる役目を働かせてゐる。蓋しデリケートな筆致はデリケートな女性の情緒を活現せしむるに最も適切なるものである。現下文壇に於ける最も新らしき傾向の一面を窺ふに足るべき作品として、又た最も清新にして強烈な

る個性的色彩を表現する作品として、敢て之を讀書子に推舉したい。

●山上より (臺灣日日新聞)

好評ある現代文藝叢書第四篇なり筆に言い知れぬ優しきと暖かみある作者の山水に遊べる記憶を書いたもの『山上より』『沼畔より』『漁村にて』『密室』の四篇を収む旅行記の最も新味あるものなり。

●草あやめ (時事新報)

『草あやめ』は後藤宙外氏の著にして、現代文藝叢書の第五篇として發行せられたるもの、『壽筵の前後』『逆縁』、外十數篇の短篇小説を

一世評般

集めたり。いづれも『新小説』あたりで一度讀みたるもの許りにて全然新らたに筆を下したりと思はるゝは一篇も見當らざれども、兎に角特色ある作家として當今の文壇に雄飛しつつある著者の作として、是れといふ傑作もなき代りに、書きなぐりの駄作なきが何よりも嬉しく感ぜらる。短篇多ければ、汽車の中や電車の中の讀物として適當なり。芽出度い『壽筵の前後』よりは、可哀想な『逆縁』の方面白く、讀者をしてホロリとせしむる處あり。

●草あやめ (徳島毎日新聞)

現代文藝叢書第五篇として後藤宙外氏の作、『壽筵の前後』、逆縁を始め、ふれ太鼓、努力、

雑祭、洪水、櫻の頃、湖畔より、浴容、寺まわり、祈禱者の十一篇を収めて有る、前の二篇は稍々長いが、後のは皆短篇である、何れも氏の一流の穩かな調子に書きこなしてあるのが嬉しい、新春の讀物として文壇を飾るべきものである、

●巢鴨の女 (二六新報)

「ミナ」「おらく」「干潮」の三篇を収めて居る第一に於てはミナと云ふ小犬の事を背景にして處女から女に成て行く乳屋の娘を描き、第二に於ては主人の家を逃げ出して自殺を企てたる少女を寫し、第三に於ては東京見物の客を迎へる家族及吉原の火事を材料にし居る、

第一、第二に於て著者の伎倆最も良く現はれ、其の作風の長所を窺ふ事が出来る、第三には描寫に稍々冗漫の箇所はあつたが、生活に疲れたる地方人を最も明晰に寫し出して居る、蓋し何れも此作者の佳作であらう。

●巢鴨の女 (信濃毎日新聞)

ミナといふ犬を背景にして處女から女になつて行く牛屋の娘お杉さんの身の上を寫した「ミナ」繼母に虐められすし屋の女將に酷使され、とても堪らないと逃出して自殺した娘を描いた「おらく」、東京見物を迎へる家族を材とした「干潮」の三篇を輯む、現代文藝叢書第六篇にして描寫は白川氏獨特の精巧を極

む、青年讀書子に薦むるを躊躇せず。

●巢鴨の女 (静岡民友新聞)

現代文藝叢書第六編として出づ野上白川の著なり内容はミナ、おらく、干潮の三編を集めたるものなり著者曰く巢鴨に七年住んだ私が觀察し考へた小説で處女から女になつた行く牛屋の娘、主人の家を逃げ出して自殺を企てた少女、東京見物の客を迎える家族、飼犬の死吉原の火事、とが材料となつてると描寫は極めて落付いつ居る内に輕妙な處がある。

●最近の小説家 (中央新聞)

現代文藝叢書の第八編として出でたる者にて

現代文藝叢書目次(其三)

- 第八編 最近の小説家(生田長江)
- 第九編 死の方へ(田山花袋)
- 第十編 物言はぬ顔(小川未明)
- 第十一編 哀花熱(兒玉花外)
- 第十二編 霧積(小山内薫)
- 第十三編 貝殼(島村苳三)
- 第十四編 葉柳(笹川臨風)

「夏目漱石氏と森鷗外氏と」「田山花袋氏」「島崎藤村氏」「泉鏡花氏」「徳田秋聲氏」「眞山青果氏」の六篇の評論を収めたり、長江氏の議論に對しては世上兎角の評あれども其の思ふ所を直截に、何處迄も突込んで縦横に論じ去り論じ來る所、現代稀に見るの論客たり殊に漱石鷗外二氏を論ずる所等は到底他の企及を許さざるものあり、評論界の甚しく沈滞したる折柄此の書の出づる實に空谷の寔音と云ふべきなり

●最近の小説家

(大阪時事新報)

現代文藝叢書の第八篇として特に批評家たる

著者の夏目漱石、森鷗外、田山花袋、島崎藤村、泉鏡花、徳田秋聲、眞山青果の七大家論を蒐録したるものなるが各篇各其の人の創作を見るが如き快味を以て讀ましむるもの好文字と稱すべく標題最近の小説家はやがて文壇最近の評論集とも見るべし。

●最近の小説家 (萬朝報)

(前略)著者は元來洞徹の眼光と皮肉の文章とを有す断片的にしてしかも聯珠の如きこの評論は即ち一家の最も得意なる壇場に最も自然なる筆法を揮ひるものといふべく、美醜を辯じ、善惡を断じて、鋒芒極めて精銳なるものあり漱石鷗外論の如きは未だ以て驚に足ら

ず、獨歩との對照は筆を起せる大なる田舎者花袋を始め、藤村、鏡花、青果に對する所論、何ぞ肯綮に當れるの甚しきや、評論界近來の珍

●死の方へ (東京時々新報)

「現代文藝叢書」の第九編として出でたるもの、「死の方へ」「幼きもの」の二篇を收めたり「死の方へ」は社會の落伍者として失意の淵に沈んだ中年の男子が忌はしき肺結核の手に捉へられ、絶望の軀を冷たき病院の一室に投げ込まれ、日に／＼死の牢獄に進みゆく運路とさうして患者の心理状態と、併せて此患者と離れ難き關係に置かれたる親戚知己、

兄弟妻子の心理に立入て赤裸々の解剖を試みたるものにして一節又一節、讀者をして生の執着より來る限なき恐怖と、死の運命に對する一種の戦慄を感じしむ。「幼きもの」は著者の前著「蒲團」の後記とも見るべく愛に盲いたる若き男女の偶然の行爲によりて此世に生たる可憐なる小兒の短き一生を描きたるものにして、此若き父と母の戀の復活までは嘗て何かの雜誌にて女主人公それ自身の告白にて讀みたる事ありしと記憶す、本篇は田山氏の所謂師弟以上に此女主公を愛し、若し道子の父にして、此世になかりせば、予は必ず世間の道徳も最愛の妻子をも顧みず彼女と烈しき戀に落ちたるならんと自白せる其師匠の立場から

其愛人と女敵の間に生れたる愛の結晶——可憐の嬰兒に對する偽らざる心事を曝露せるもの、花袋氏が日頃主張する現實曝露に對する著者の大膽眞摯なる態度により多く驚嘆したりといふ以外に、評者は多く言ふ處を知らざるものなり。

●死の方へ (心の花)

生涯不遇に終つた男の最後に肺病で入院する餘儀なくこれまで生活費にも世話かけた弟それも僅な給料の中から病院の費用まで厄介になるといふのが非常に心苦しいといふ病外の苦しみ看護をする苦しさよりもその方を一倍苦にする其妻よく見舞つてよく世話をして

居る弟が大事の貯金に手がづくに至つてすまぬと思ひながら不治の人に貢ぐのはつまらぬと思ふ心の裡始めから同情のない弟の妻の心など世間有がちの事がらを抉つて描いたそれに幼きものゝ一篇を添へてある。

●死の方へ (廣岡中國)

現代文藝叢書第九編で漸次に死の方に近づきつゝある肺病の患者や之を取巻いた周囲の種々な人物の消沈して行く心的状態が奈何にも痛切に描かれて讀んでひし／＼胸に喰入やうな作である、他に「幼き者」が一編收められてある。

●死の方へ (早稲田文學)

「死の方へ」及び「幼き者」の二編を收む。共に最近文壇有数の佳作で、「死の方へ」に於ては此作者の描寫の圓熟と、ナイヒリスチックに傾きつゝある主觀の深さとを窺ふべく「幼き者」には運命の數奇に弄ばれて短き一生を父母ならぬ父母の間に終る幼兒の姿を見る。ヒューマンドキユーメントとしてはた立派な藝術品として推奨に値する。

●物言はぬ顔 (貿易新報)

現代文藝叢書第十編として刊行せられたるものにして書題の「物言はぬ顔」をはじめ「薔薇

と巫女」「死」「奇怪な犯罪」都合四篇を收載せり、何れも短篇ながら讀みごたへのある作なり。

●物言はぬ顔 (文章世界)

「物言はぬ顔」「薔薇と巫女」「死」「奇怪な犯罪」の四編を收めてある。著者は序の中に、「死」といふ暗い恐ろしい運命をぢつと見詰めて藝術の對象としたといふ意味のことを書いてゐる。

●物言はぬ顔 (心の花)

あはれな一人兒を残して死んだ母を叙した前後が最よく突込んで描かれて居る懷れむべき

孤兒出入をしなかつた叔父母が飛んで来て世話を焼く母の氣に入つて居つた車夫何れも口にしなない各々の心の閃がよく現はされて居る則主人公である叔父母の残忍な人物よくあるタイプながら如何にも面のあたり接してゐるやうでハラ／＼させる「薔薇と巫女」「死」「奇怪な犯罪」の三篇を併せて現代文藝叢書の十篇となつたのである。

●哀花熱花 (新潮)

花外氏は其の感情の燃え來れる時は、さながら烈火の如きものがある。當るもの、觸るもの、總べてを焼き盡さずんば止まざるの熱がある。そして、其の感情を以て直ちに物に

觸れ、感じて、其の熱火を紙上に吐露して行く。其所に花外氏の生命と、眞價とがある。此の集は、斯う云ふ特色を有する著者が折りに觸れ、事に應じて發した火花を集めたものである。「哀花熱花」と云ふ表題は、まことに著者の特色を遺憾なく表現したものと云はればならぬ。集められたところはいづれも皆断片ではあるけれども、其飽くまで人の胸を突かざれば己まぬと云ふ熱と、力と、氣魄とが見える。若い血の躍る青年が讀んで何等か其の生命の琴線に觸れるものがあらう。

●哀花熱花 (讀賣新聞)

本書は著者が其の折り／＼に感じたる小品三

十餘篇を收めたる物にして其の題名は最もよく著者の特色を發揮したるものなり。物に觸れて哀しみ、事に當りて熱する事著者の如きは異敵なり。

●哀花熱花 (帝國文學)

藝人や苦力や東京の女や山岳や柳や風濤や女優や乞食や、あらゆる自然の風物と都會田園の人間とが、例の花外氏の強烈な色調にうつされたのが本書である。一味の詩趣を途上の寓象にとらへて、哀しみ泣き愛へ愛しいつくしむこの詩人の境地には至純な可憐なナチュラリスティックな、そしてロマンティックな情趣がある。

●哀花熱花 (高知新聞)

「藝人の悲哀」「泥船」「久世山の夏草」外三十二篇を收めてある、花外氏の小品は實に氏獨特のもので其の文想觸るゝところ悉くを焼き又遂に己を焼き悉くさすんば止まざるの概がある、現代人の熱き哀みを味はんとする者は本書を讀め。

●哀花熱花 (三重日々新聞)

好評噴々たる文藝叢書も既に第十一編に達し今回は兒玉花外氏の哀花熱花を出す藝人の悲哀より始まつて九十九灣の一夜に終る都合三十五編花外氏獨特の文意達筆を味ふ得べし。

●積霧 (二六新報)

「霧積」「東京へ」「近所」の三篇を収めたり、「霧積」は一少年が母と共に信州霧積温泉に赴く途中悪漢に惱まれたる物語にして、「東京へ」は其の少年が東京を出發して東北の知人の許に赴きたる記事なり、共に著者獨特の輕快なる筆を以て叙したり、著者の作品中比較的長篇なれども他の作品よりは稍々調子の異なるもの

●霧積 (大阪毎日新聞)

現代文藝叢書の第十二編にして著者が才氣に富んだ江戸子風の輕快な筆致で物したる霧

積、東京へ、近所の三短篇小説を收む

●霧積 (山形日報)

小山内薫氏の著に係る、題命は霧積なるも外に東京へ、近所の二篇を輯む、共に著者が其折々の感得をば例の流暢なる筆もて平盤的に書き録せるもの、寓意、妙想讀んで自から釋然たるべし。

●霧積 (下野日々新聞)

本編には霧積、東京へ、近所の三ツを收めたり。本叢書は其名に背かず現代的代表的にして趣味の紙面に躍如たるものあるは一度之に觸るゝもの、首肯する所なり宜なり上梓旬日を出ですして數版を重ねるゝや

讀者諸賢と出版者

本叢書を御購讀の上は、何事によらず是に附ての所感を寄せられん事を希望します。

敢て本文の批評には限りません、爾後の著者や、作物の種類などの御希望を記して戴きたいのです。

文體は書簡文でも、言文一致でも、美文でも差支ありません。長短も制限なく葉書でも封書でも御隨意であります。

御寄稿は毎月弊堂發行の「圖書目録」に掲載致します。

宛名は「東京日本橋通四丁目春陽堂出版部」と願ひます。

夫れば本叢書の増版になる時に改良を加へ且又爾後出版の参考に致します。

270

429

終

